●3年ぶりの開催

昨年10月の最終日曜日、秋晴れのもと、3年ぶりに連光寺地区で「農業ウォッチングラリー」を開催しました。

連光寺地区といえば、六丁目などの一部は、海抜およそ150メートルのところに位置していて、多摩市で最も寒いエリアです。全行程約4キロとはいえ、起伏が激しく、数あるウォッチングラリーのコースの中でも、かなりハードな部類に属するものとなっています。

ウォッチングラリーは人気のあるイベントで、毎回楽しみにしているリピーターも多く、今回は17組26名の参加者がありました。

3年ぶりとはいえ、まだコロナ禍ということもあり、市内産野菜を使った豚汁を食べながらの懇親会は中止とし、今回は、野菜収穫を重点的に行うイベントとしました。

●小カブの収穫

午前9時に連光寺小学校へ集合し、市長、会長の挨拶のあと、2班に分かれて出発！　はじめの収穫場所は、出発地からほど近い小島さんの畑で、小カブを収穫しました。参加者たちは、きれいに整理された畑から、まぶしく映るほどの白い小カブを次々と掘り出し、笑顔がこぼれていました。

●原風景と歴史的遺産

次の畑へ移動する間に、谷戸田の棚田を見学しました。40枚ほどのこの田んぼは、現在は都立桜ヶ丘公園内にありますが、公園になる前は、3軒の農家が米作をしていました。今は、多摩市の原風景を維持するために、桜ヶ丘公園のボランティアさんが米作を続けており、収穫した米で、毎年餅をついて近隣に振る舞っているそうです。

歩みを進め鬱蒼とした竹林を抜けてたどり着いたのは、名誉都民である辻清明(つじせいめい)さんの登り窯です。清明さんの息子さんが現地で説明をしてくださいました。辻さんは2008年にお亡くなりになりましたが、没後も国内外で展覧会が開催されるなど、多くの人々に愛される作品を多数残されました。当時、作品を作るときは、信楽の土を使い、高温に適しているアカマツの薪を使って燃やしていたため、登り窯からは黒々とした煙が立ち上っていたそうです。参加者のほとんどが、今回初めて訪れた場所ということもあり、「多摩市にとって歴史的にも大切な遺産が、自分たちの住んでいるこんな身近なところにあったなんて…！」と感嘆しているようでした。

▲原風景の棚田を見る

さらに坂道を上っていくと、開けた場所に出ました。ゆうひの丘公園です。眼下には広大な景色が一望でき、天候に恵まれたせいか、遠くには埼玉県の西武ドームまで見渡すことができました。

●小松菜の収穫

続けて坂を上って到着したのは、萩原弘さんの畑で、こちらでは小松菜を収穫します。青々と育った小松菜を一束、また一束とていねいに引き抜き、みるみるうちに参加者の収穫袋はふくらんでいきました。また、萩原弘さんは野菜栽培だけでなく、花卉(かき＝観賞用のお花)農家ということもあり、圃場を見回すと辺り一面、きれいな色をしたビオラ等でいっぱいでした。

▲小松菜 バンザイ！

●サツマイモの収穫

少々重くなった収穫物を持ちながら、さらに移動を開始。米軍サービス補助施設のゴルフ場を左に、市民体験農園を右に見ながら、最後の収穫場所、萩原重治さんの畑へ到着、ここでは、サツマイモの収穫を行いました。

有機農業を実践されている圃場は、土がふかふかで、見るからにおいしそうなお芋がしっかりと育っていました。サツマイモ収穫では作業の邪魔になる蔓(つる)も、リースを作ることが出来るなど、再利用の価値もあって、数名の参加者の方々は、蔓も大事そうに持ち帰っていました。

参加者の皆さんは、リュックサックに入りきれないほどに収穫した野菜を両手にぶら下げたまま、現地解散となりました。きっと心地よい重みを感じながら、帰途についたことでしょう。

▲お芋ほりはみんな夢中になります！

●本イベントへの誘い

はたして、来年のウォッチングラリーは、どのエリアを巡ることになるのでしょうか？　楽しみに待ちながら、畑を巡るだけではなく、都市農業を考えるきっかけづくりや多摩の歴史も学ぶことができる農業ウォッチングラリーへ、皆様方ぜひ、ご参加ください。

多摩市の新しい魅力が、発見できるかもしれませんよ…!?

（農業委員　武内 好惠）